

# 夏の発見／ターナーとブルネルとメイデンヘッド橋

大量輸送を構想し、軌間2.19m超の広軌鉄道とした。さらに駅舎・橋・トンネルなどにはアートを取り入れて設計開発した。

炭木の子りによれば、人間には「偉大なる英国人」の投票では、大きさを表現した。

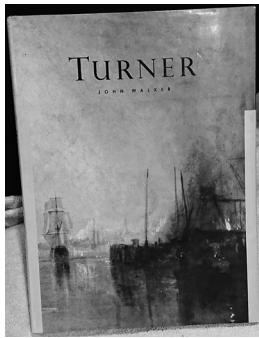
「行方不明の時間」が必要であるチャールに次ぎ第2位の得票であった。今年の夏休暇は軽井沢にあった。2012年のロンドンオ

ブルネルの活躍はテムズ河の川底トンネルに端を発するが、ブリスタルのクリフトン吊り橋の設計のデザインからメイデンヘッド・ブリッジ駅までの約40kmが1838年に開通した。同駅

いう。ゆつくりと来る台風7号のリンピックの開会式では、MC役コンペの成功に始まり、ロンドン・ブリスタルの190kmのGW（グレイト・ウエスタン・レイルウェイ）につながった。また、ズ河が流れている。ブルネルは、

ロンドンからイングランド南西部のランズエンドまでの鉄道だけでなく、レンガ造りの優雅な2連の鉄道アーチ橋を設計し完成させた。工事中には陥落するだろうと噂されたが問題なく、現在では特急列車のインスタンティも走っている。

と少し大型の本が見つかった。英国の画家ターナーの画集『TURNER』である。これこそが「地元力発見」かと、コラムに取り上げることにした。



Jonn Walker 著 による本 (1983年刊)

彼は、蒸気鉄道に、高速・安定・のインスタンティも走っている。

前の夏休みには英国に出かけることをしていた。ある年は半年も出かけて、冒頭に述べた「行方不明の時間」を過ごしていた。ロンドン・ヒースロー空港にほど近いブルネル大学に滞在し、ウィークエンドには心惹かれた粉ひき風車の調査見学、そして大学名になって

## 新たにターナーの作風について再発見

GWの列車は、ブリス、機関車(Firefly)という車種の専用路として強調した。向かっている。この絵に題名の「雨」は左右の河面を霧中

いるイザムバード・キングダム・ブルネル(1806~1859)に「雨、蒸気、スピード・グレート・ウエスタン鉄道」を描いた。筆者はメイデンヘッドの

例え、GWははじめ英国の鉄道は複線であるが、あえて単線と

ブルネルは、英国では有名なエンジニアで、BBCの企画による経験から、この絵を解釈してみる。まず、

今回紹介する画家のジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー乗車した雨の日の情感が溢れている。そして、ターナーの新時代の鉄道への思い入れを汲み取ることができる。

ターナーの冒険(一部)

## 地元力発見!!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

こと、この



ターナー画『雨、蒸気、スピード・グレート・ウエスタン鉄道』(1844年)

と、そこには歓喜する人々も描かれている。「蒸気」は煙突から三つの白煙として描いている。同時に時代の表象として、石炭が燃焼する火炉を機関車前面に可視的に描き、「スピード」の動力源の存在を強調している。

著者Walkerは、ターナーは画家としては例外的に産業革命による近代性を称賛し、この絵のように描いたのでないかと解説している。ブルネルの筆名ではあるが、無為の夏休暇に新たにターナーの作風について再発見することができた。ターナーとブルネルについて、再度、現地調査したいものである。

1950年山形生まれ。

東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授

(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努める

とともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒

「鐵の道」の製造・販売を企画(すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人洗楓座)代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。